

# 海事英語指導の方略研究 (Ⅲ)

—鹿児島大学水産学部学生の指導事例について—

On Teaching Methods for Marine English (Ⅲ)

— Focusing on Kagoshima University Junior and Senior Students Majoring in Fisheries —

坂本育生・橋口美紀\*

SAKAMOTO Ikuo・HASHIGUCHI Miki

キーワード：海事英語、ESP、授業評価

## 緒言

本論文は、昨年発表した坂本・橋口の共同研究『海事英語指導の方略研究(I)』、『海事英語指導の方略研究(II)』に引き続いて、鹿児島大学水産学部学部生を指導した平成13年度後期授業の具体的な指導事例の研究論文である。

海事英語は、ESP (English for Specific Purposes) の一例としての重要な研究分野であるが、学部数や学生数の少なさを反映し、これまでその具体的な指導事例の発表はほとんど為されていない。もっとも筆者のひとり坂本も、20年あまり水産学部3、4年生、また学部を終えた専攻生の海事英語の授業を担当してきたが、その指導方略を発表したり学生に対しての正式な授業評価を行なったこともあまりなかった。<sup>1)</sup>

そこで本論文においては、シラバスに基づいてその指導方略を詳述し、さらには学期末に実施した学生に対しての無記名授業評価のアンケートも公表する。もとより大学でも、教育の充実と授業の自己評価が求められる時代であるので、授業者への批判は、謙虚に受け止める姿勢で実施した。幸いにして、少人数教育(最終受講者7名)という恵まれた教育環境や、専攻関係分野の英語教材の授業という学生のモチベーションの高さもあり、授業評価は概ね良好であった。

## I. 海事英語指導の具体的指導方略

水産学部のシラバスに基づいて、学部生対象の海事英語の(1)概要、(2)目標、(3)内容、(4)教材、テキスト、(5)評価等について、順を追って詳述してみよう。

### I-1) 海事英語(学部生対象)の概要

学部生対象の海事英語の授業は、主に漁業航海学専攻の3、4年生の2単位の選択必修科目である。もっとも、漁業航海専攻以外の学生も受講でき、国際海洋社会学や、海洋資源科学専攻の学生も受講している。以前は水産学部生といえば、ほとんど男子学生であったが、最近の男女比率は半半か、むしろ女子学生が多い傾向が強い。平成13年度後期の授業(2001年10月～2002年2月)の際も、学期当初の登録者は19名(男子9名、女子10名)であり、学期末試験受験者は7名(男子3名、女子4名)で、受験者は全員合格し単位を習得した。

受講態度や姿勢も、概ね女子学生の方が積極的であり、成績もよい(男子：優1名、良2名、女子：優3名、良1名)。特に、最近の就職難を反映し、卒業と就職を控えた3、4年生の授業への姿勢は、一般にかなり真面目になってきているように思われる。また4年生で就職が内定した後に、企業から、卒業までにTOEICで600点以上、英語検定2級以上の運用能力を求められて相談に来る学生も多い。

\* 鹿児島大学教育学部英語教育、鹿屋体育大学外国語教育センター

## I-(2) 目標

一般的目標としては、「今日の国際航海に従事するものにとって必須の知識である英語力を、リーディング、ライティング、スピーキング、リスニングの4分野に渡って多角的に向上させることを目標とする。」としている。学部を終えた航海科専攻生と異なり、漁業航海の学部生が中心ではあるが、様々な学科の学生が受講し、個人のレベルもかなり開きがあるので、具体的な目標設定がなかなか困難である。理想としては、概要の項目で述べたように、概して TOEIC 700点以上、TOEFL ペーパーテストで500点以上が国際的に通じる大学生レベルの水準であろうが、そのレベルに学部段階で到達できる学生は、水産学部1学年約200名中数名であろう。<sup>2)</sup>

また、内容や教材の項目とも重複するが、国際航海に従事する者にとっての英語であるから、所謂海事英語の基本語彙・術語の習得も、当然重要な目標となる。<sup>3)</sup>

## I-(3) 内容

様々な学科から学生が受講するので、学部生の海事英語においては、学生の乗船実習に備えて、「船員実務英会話」のテキスト、テープ、ビデオで海事英会話中心の授業を行なっている。また平成13年度後期の授業においては、水産学部の先生方のご協力により、水産学部で学んでいる外国人留学生の中から、英会話の出来る留学生に当初の授業に来てもらい、直接受講生との海事英会話の運用練習を実施することが出来、学生の評判も概ね良好であった。特に、乗船実習で海外へ渡航する実習生も多く、大変役だったとの評価であった。以下に授業内容の詳細を列挙しておく。

- 内容(1) : 船員実務英会話「入港」  
: 留学生と入港の際の海事英会話の指導 (2 コマ計180分)
- 内容(2) : 船員実務英会話「乗船」  
: 留学生と乗船の際の海事英会話の指導 (2 コマ計180分)
- 内容(3) : 船員実務英会話(3)着岸  
: 着岸時の海事英会話の学生同志の対話・会話練習 (90分 2 コマ計180分)

- 内容(4) : 船員実務英会話(4)港湾事情聴取  
: 港湾や税関での専門用語を用いてのやや高度な海事英会話の具体的な指導 (90分 2 コマ180分)
- 内容(5) : 船員実務英会話(5)代理店との打ち合わせ  
: 代理店員と一等航海士との専門用語を用いてのやや高度な交渉英語の具体的な指導 (90分 2 コマ180分)
- 内容(6) : 授業全体の総復習 (2 コマ)
- 内容(7) : 授業および教材の総まとめ (1 コマ)  
: 海事英語の専門語彙・術語の復習 (1 コマ)
- 内容(8) : 学期末試験  
: 90分による筆記・口述による総合テスト

一週間1コマ(90分)で、試験を含めて計15回の授業を実施したが、何とか当初計画した内容を消化することが出来た。途中までしか留学生が参加できなかったのは残念であったが、受講生にとっては、大変貴重な経験となり、海事英語の意義を認識できた様子であった。もっとも、漁業航海専攻以外の学生は、途中で放棄する学生が多かったが、この点は多少やむを得ないであろう。

## I-(4) 教材・テキスト

テキストは、先に述べたように、日本郵船株式会社海務部編集、成山堂書店発行の「船員実務英会話 (Practical English Conversation for Seamen)」とそのテープを主に使用し、専らその実用運用能力の育成を授業の中心とした。つまり、文法訳読は全く行なわず、英文の発音練習を十分に行なわせた。また単なる丸暗記では意味をなさないので、臨機応変な対応が出来るように、対話や応用の練習も行なった。19名中12名が途中で脱落したが、最後まで残った学生は、一定の成果を修め、概ね満足した様子であった。

その他の所謂「投げ込み教材」として、参考文献に記してある、より専門的な辞書、参考書、問題集などを時折紹介したが、航海科の学生が特に

興味を示していた。<sup>4)</sup>

### I-(5) 評価

成績評価は、「出席、平常点および期末試験により総合的に評価する。」とした。当初の受講生19名に対し、最後まで残った学生は7名であり、その7名中5名が優（80点以上）、2名が良（70点～79点）となった。結果としては、多くの学生が脱落したが、残った学生は真面目に最後までほとんどサボることなく頑張ったといえる。（実際7名の期末試験受験者の出席率はほぼ皆勤であった。）

期末試験の内容は、(1) 海事英会話の和文英訳、(2) 英文に関する英問英答、(3) 英語の聞き取り書き取りテスト (Dictation)、(4) 英語の口述テストの4形式であった。専門用語も多く、若干難しいものであったが、60%から80%の出来であった。一般に水産学部学生の英語力は、確かにあまり高くはないが、訓練を積めば、かなりの成果をあげることが実証された。（尚巻末にAppendixとして授業で取り扱った海事英会話教材を掲載しておく。）

## II. 学生による授業評価

鹿児島大学教育学部英語科では、2001年度から独自の授業評価アンケートを作成し、各教官の授業の自己評価と授業改善を図っている。今回の海事英語の授業は、教育学部英語科の授業ではなかったが、ESP教育研究の一例としての海事英語の自己評価として、独自のアンケート調査を実施してみた。

サンプルは、わずか7名であり、有意な統計とは言えないが、海事英語の授業評価としては貴重な事例となるかもしれないので、その調査結果を掲載することとした。尚、調査は期末試験終了後、教官が一旦退席し、無記名の条件のもとで実施した。

### II-(1) 海事英語の授業評価の内容と結果

今回の調査内容とその結果は以下の通りである。

このアンケート調査は、皆さんが受けた授業を今後もっとよいものにしていくために実施す

るものです。下記の5段階で評価し、番号に○印をつけてください。名前を書く必要はありませんので、思った通り率直に記入して下さい。

5：はい。

4：まあそう思う。

3：どちらともいえない。

2：あまりそうは思わない。

1：いいえ。

### I 授業について

1：授業科目にふさわしいレベルの内容であった。

5：3名、4：3名、3：1名

2：0名、1：0名、平均値：4.29

2：シラバスの内容は明確であった。

5：0名、4：1名、3：1名

2：0名、1：0名、平均値：3.50<sup>5)</sup>

3：授業内容はシラバスに沿ったものだった。

5：0名、4：1名、3：1名

2：0名、1：0名、平均値：3.50

4：授業の進度は適切であった。

5：3名、4：3名、3：1名

2：0名、1：0名、平均値：4.29

5：この授業はあなたの授業科目に対する興味を高めてくれた。

5：2名、4：3名、3：2名

2：0名、1：0名、平均値：4.0

6：この授業はこの授業以外の勉強に役だった。

5：3名、4：2名、3：1名

2：1名、1：0名、平均値：4.0

7：この授業を他の学生に薦めたいと思う。

5：2名、4：2名、3：2名

2：1名、1：0名、平均値：3.71

8：授業の雰囲気は学習にふわしいものであった。

5：4名、4：2名、3：1名

2：0名、1：0名、平均値：4.43

### II 教師について

9：話し方は明瞭で聞き取りやすかった。

5：5名、4：2名、3：0名

2：0名、1：0名、平均値：4.71

- 10: 教材の説明は明確だった。  
 5: 3名、4: 2名、3: 1名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.14
- 11: 授業の準備は入念になされていた。  
 5: 3名、4: 4名、3: 0名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.43
- 12: 90分時間いっぱい授業がなされた。  
 5: 3名、4: 2名、3: 2名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.14
- 13: 質問や相談に丁寧に応じてくれた。  
 5: 3名、4: 2名、3: 2名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.14
- 14: 課題は適切であった。  
 5: 4名、4: 2名、3: 2名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.86

### III 教材等について

- 15: 教材はシラバスの内容にふさわしかった。  
 5: 0名、4: 2名、3: 1名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 3.67
- 16: 教材は興味を引く内容だった。  
 5: 2名、4: 3名、3: 3名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.43

### IV あなた自身について

- 17: 出席状況は良好だった。  
 5: 3名、4: 3名、3: 1名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.29
- 18: 授業には毎回遅れずに出席した。  
 5: 3名、4: 2名、3: 2名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.14
- 19: 授業に積極的に参加した。  
 5: 2名、4: 4名、3: 1名  
 2: 0名、1: 0名、
- 20: 授業の準備を毎回やった。  
 5: 6名、4: 1名、3: 0名  
 2: 0名、1: 0名、平均値: 4.86

V この授業について、もっとこういう点を改善してほしい、こういう点は今後も維持してほしい等、授業に対する意見や要望等があれば、自由に書いてください。

- (1) 少人数で大変充実した授業でした。
- (2) 海事英語に接するいい機会となりました。特に留学生との対話は、臨場感があり大変役に立ちました。
- (3) 毎回必ずあたるので、大変しんどい授業でしたがためになりました。やはり少人数クラスの演習が一番でしょう。
- (4) 漁業航海専攻の学生には役立ちますが、そのほかの学生には、あまり関係ないかもしれません。特殊性が強いですね。
- (5) 名前をすっかり覚えられたのでさぼれませんでした。でも役に立って楽しかったです。半期間でしたが有り難うございました。
- (6) テープは役だったが、留学生がずっと参加してくれればもっとよかった。
- (7) 日本にいと普段は英語なしでも暮らせるのであまり英語の必要性を感じませんが、乗船実習のときに大変役立つでしょう。

### II-(2) 授業評価の総括

無記名記述のアンケートであり、教官の機嫌をうかがう必要は全くない調査であったが、結果は概ね肯定的なものであった。20項目全体の平均値は4.25であったが、特に学生自身の自己評価項目17~20においては、その平均値は4.36となり、かなり高数値となった。

一般に、このような無記名の授業評価アンケートにおいては、かなりいいかげんな記述をする学生が多い。鹿児島大学の共通教育委員会による授業評価においても、単なる個人攻撃や学生自身のモチベーションの低さを示すだけの記述が多いのが現実であるが、今回の調査においては、そのようないいかげんな記述は皆無であった。共通教育と学部教育の違いもあるが、本論文における鹿児島大学水産学部学部生の海事英語の指導事例が21世紀のESP研究のひとつの参考となるかもしれない。

## III. 成果と展望

### III-(1) 成果

最終受講者わずか7名という極めて小規模な指

導事例であるが、本論文での鹿児島大学水産学部学部生に対しての海事英語指導方略は、今回に限れば概ね成功と言えるであろう。その主な理由として、次の5項目を列挙し検討してみよう。

- (1) 少人数教育の実施
- (2) モティベーションの高さ
- (3) 実用教材の効用
- (4) 留学生の支援
- (5) 乗船実習との連携

共通教育の語学の授業では、少人数教育の英語オーラルでさえも30名前後であり、再履修の学生数が多くなると、100名を越える授業すら存在する。語学の授業で100名を越えればそのクラスの効果はほとんど皆無であろう。幸いにして今回の指導事例においては、当初の登録者数19名、最終試験受験者7名という、極めて少人数の授業であったため、受講者全員の氏名を覚えることも、それぞれの学生のレベルに応じたきめ細かな指導も可能であった。

また学生側のモチベーションの高さとの相乗効果もあり、理想的な状態で指導できたといえよう。もっとも漁業航海科以外の学生は、途中脱落する学生が多く、遺憾であった。

教材としては、極めて実用的な船員実務英会話であったが、このことが学生の積極的な姿勢を生み出すこととなった。航海科専攻生の場合には、海技士試験を控え、難解な海事関係の英文解釈や英文和訳が必要となるが、学部生に対しては、授業では紹介程度に止め、今回は一切取り扱わなかった。<sup>6)</sup> その理由としては、乗船実習で初めて船で海外の港を訪問する事前の対策として、何よりも、音声としての海事英語に親しみ、実際の場での意志疎通を経験してほしかったからである。そのためには、外国人留学生との実際の会話が非常に役だったと思われる。しかも今回の留学生は、英語を母国語とはしないが、かなり流暢に話すインドからの留学生であり、韓国、台湾、フィリピン、香港などに乗船実習に行く学部学生のニーズに大いに叶ったものであった。英語という言葉で、単に英・米人等の英語を母国語とするいわゆる inner circle の人々のみの言葉としてでは

なく、母国語に続く公共の場で第二言語として英語を使う outer circle の人々との対話練習を目差したのである。

授業の評価・要望欄にも述べてあったように、国境を持たず、あまり外国と直接接することがない日本人にとっては、海外渡航の経験が何よりも貴重である。特に水産学部学生にとっては、船での海外渡航を実際に経験する乗船実習と、この海事英語の授業の連携が極めて重要になる。授業の成果並びにESP教育の実践として、乗船実習の経験を積んできてほしいと願っている。留学生と教官が協力しつつESP教育の実践を行なう必要があるように思われる。

### Ⅲ- (2) 展望

ESPが21世紀の大学英語教育において、重要な役割を果たすであろうことは、多くの場で主張されており、もはや疑いの余地はない。ただここでさらに強調したい点は、ESP教育と実習活動との連携である。例えば海事英語の指導事例では、乗船実習という大きな目的があるために、受講者のモチベーションを大いに高め、大きな成果をあげることができたし、留学生との英語での直接交渉は、大変意義深かった。

今後は、海事英語以外の様々な分野のESP教育において、多くの実践的指導が成果をあげることを大いに期待したい。本稿が、今後のESP教育のひとつの指針となることができれば、筆者としては、これに勝る喜びはない。

#### (参考文献)

- 安藤昭和一編集 (1991) 『英語教育 現代キーワード事典』 大阪：増進堂
- Hutchinson, T, & Waters Allen (1987) *English For Specific Purposes: A Learning Centered Approach*. Cambridge University Press
- 深山晶子編集 (2000) 『ESPの理論と実践－これで日本の英語教育が変わる』 東京：三修社
- 石川晴一編集 (1983) 『IMCO標準海事航海英語－術語と会話』 東京：成山堂書店
- 今津隼馬 (2000) 『01航海科一級・二級・三級試験問題解答集 (平成11年10月～平成12年7月)』

東京：海文堂

J A C E T (大学英語教育学会) 教育問題研究会  
編集 (1998) 『英語科教育の基礎と実践—新しい時代の英語教員をめざして—』 東京：株式会社三修社

海上保安庁警備救難部航行安全課監修 (2000)

『海上交通関係法令』 東京：海文堂

鹿児島大学水産学部 (1999) 『水産学部履修の手引き』 鹿児島：鹿児島大学

航海技術研究会 (1998) 『二級海技士 (航海) 800題』 東京：成山堂書店

神戸商船大学海事用語事典編集委員会 (1998)

『英和海事用語事典』 東京：海文堂

森田俊樹、中井昇 (2000) *Basic Elements for Marine Engines* 東京：海文堂書店

日本郵船株式会社海務部編集 (1984) 『船員実務英会話』 東京：成山堂書店

Paul Sminkey, & Ikuo Sakamoto (1994) *Gifts of the Sea*. Tokyo: Nan'Un-Do

逆井保治編集 ((1981) 『英和海事大事典』 東京：成山堂書店

坂本育生・橋口美紀 (2001) 『海事英語指導の方略研究 (I) — E S P 教育の意義を中心として—』 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第11巻 pp. 83-89.

坂本育生・橋口美紀 (2001) 『海事英語指導の方略研究 (II) — 海事英会話の顕著な特徴と基本語彙を中心として—』 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第11巻 pp. 91-96.

注)

1) 現在国立大学水産学部及び商船学部は、わずか6あまりであり、しかも水産大学と商船大学の統合や、農学部と水産学部の再編成の動きもあり、将来は予断を許さない状況である。

2) 水産学部では、学生の英語力向上の目的で、入学当初から、水産学部独自の「実用英語演習」「TOEFL入門」「TOEIC入門」等の授業を開講して、学生の英語力向上を図っている。

3) 海事英語特有の専門用語・術語、文法的に顕著な特徴については、坂本・橋口 (2001) の二

編の論文を参照。

4) 教材や参考図書に関しては、参考文献を参照。

5) シラバスに関する質問事項では、アンケートの回答に若干の空欄がみられ、合計サンプル数が7名になっていない。これは、シラバスを読まなかった学生が若干存在し、回答できなかったものと思われる。

6) 航海科専攻生の海事英語においては、当然のことながら、「海技士試験」のテスト対策が主要な問題となる。

#### (Appendix)

#### Practical English Conversation for Seaman

##### (1) Entering Port (入港)

Pilot : Lower the pilot ladder on the  
(水先人) port side, please.

(左舷のパイロットラダーを下げてください。)

Deck hand : All right. Is it all right at this height?

(了解。高さはこれでよろしいでしょうか。)

Pilot : Lower it some more.

(水先人) (もう少しさげてください。)

Deck hand : Now, how is it?

(甲板員) (さあ、これでよろしいか)

Pilot : Yes, that's good. Drop the heaving

(水先人) line to lift my bag.

(はいよろしい。カバンをあげるラインをおろしてくれ。)

Deck Hand : OK. Watch your head. I'm throwing it.

(承知した。頭に気をつけろ。ラインを投げるぞ。)

##### (2) Alongside the deck (着岸)

Line man : Watch out! I'm throwing up the  
(綱取り) heaving line.

(気をつけろ。ヒービングラインを投げるぞ。)

Deck hand : All right. (了解。)

(甲板員)

Line man : Take it easy. Hold it a minute!  
(網取り) (そんなに急ぐな。ちょっと止めてくれ。)

Chief officer : Now,hold on! What happened?  
(一等航海士) Is she in position?  
(おっと止めろ。どうしたんだ。船の位置はいいか。)

Berth master : 15 feet more ahead.  
(バースマ (あと15フィート前に上がってくださいスター) い。)

Chief officer : Slack away the back spring  
(一等航海士) and heave in the head lines!How many feet more?  
(バックスプリングを伸ばし、ヘッドラインを巻け。あともう何フィートですか。)

Berth master : Three feet more. Hold on. Oh,  
(バースマ she's gone too far. Pull her back fiveスター) feet!  
(あと3フィート。止めろ。行き過ぎた。5フィート下がって。)

Chief officer : That's OK? (よろしいか。)  
(一等航海士)

Berth master : All right. Make fast the lines so she  
(バースマ will not move.  
スター) (よし、船が動かないようにラインをしっかりと止めてくれ。)